

善一田古墳群

[表のキャプション]

これらの古墳は、6 世紀後半から 7 世紀にかけてのものである。この古墳群は地域の鉄工職人のもので、その専門性によって地域社会の高位なメンバーであった。古墳からは朝鮮半島の土器が出土しており、大宰府が設置されるより 1 世紀前から活発な交易と文化的な交流が行われていたことが伺える。

[裏の解説]

善一田古墳は、古墳時代（3～7 世紀）の比較的後期、6 世紀後半から 7 世紀にかけて築造された。古墳は 3 世紀中頃から、日本各地の支配層によって、自らの富と権力を誇示するために築かれるようになった。善一田古墳が築造される頃には、その習慣はより劣る立場の地方有力者にまで広がっていた。研究者達は、善一田古墳の最古で最大の墳丘（No.18）は地域の首長のものだと考えている。

善一田に保存されている 9 基の古墳は、九州の古墳の特徴である丸いドーム型をしている。最奥部の埋葬室の壁や天井には石が使われており、その多くは数トンもある巨大なものであった。この地域は酸性土壌のため、骨や遺骨は残っていない。しかし、死者は遺品とともに埋葬され、その多くが

発見されている。その中には、道具、刀剣、馬具（あぶみと手綱の部品）など、当時の日本では珍

しい鉄製品も数多く含まれている。これらの発見は、考古学者に当時の人々の生活を垣間見せる。

鉄工や乗馬の技術は、朝鮮半島との交流によってもたらされたものであった。新羅王朝（～935 年）

の土器や、現在のイラクにあたる地域産のガラス玉も出土しており、この社会とアジア大陸を結ぶ広

範な交易網があったことが伺える。

この古墳群からは合計 30 基の墳丘が発見されているが、そのうち 2 基は未発掘である。太宰府地

域（および全国）での古墳の築造は、社会が中央集権的な法体系に移行し、地方の支配者が

権威を誇示する圧力を受けなくなったため、消滅したと考えられている。